

# 社会情報学基礎ゼミナールにおける取り組み

— 1997年度の取り組みの総括と今後のゼミへの提言 —

森田 彦・吉野 巖・後藤 靖宏・竹田 唯史・高橋 哲男

本社会情報学部では、1年次の学生に社会情報学基礎ゼミナールを必修科目として課している。このような1年生対象のゼミの場合、多くの学生がまだゼミ形式に慣れていないため、ゼミ生が積極的に発言する活発な雰囲気を作成することは容易なことではない。森田担当の4つのゼミでもゼミを活気のあるものとするために、様々なやり方を試みた。特に、電子メールやプレゼンテーションツールの活用がゼミの活性化にどのような効果をもたらすかについて注目した。本稿ではそれら試みを総括し、そこから、今後のゼミをより活気のあるものとするための指針となる点をまとめた。

## 1. 序 論

本社会情報学部では、1年次の学生を対象に社会情報学基礎ゼミナールを必修科目として課している。これは、他人の意見を聞きそれを理解した上で自分の意見を述べる、というゼミ形式を早い時期に経験することによって、講義のみでは獲得しにくい能動的な学習姿勢を身につけさせる事を目的としたものである。

その実施形態は次の通りである。各ゼミは15~16名からなり、今年度の1年生の場合16のゼミ単位がある。一方これを担当する本学部専任教員の数は延べ4名であり、一人の教員が4つのゼミを担当する事になる。もちろん、これでは実際上各ゼミの指導をすることはできないので各ゼミ単位に演習教育指導員として北大大学院博士課程の院生を配置している。従って実質的に各ゼミの指導はこれら

指導員が当たり、教員は担当の4つのゼミを適宜巡回し、必要な指導を与えるという形態を採っている。

筆者らは1年次にゼミナールを置くことに異論はない。むしろ早い時期に講義と全く異なる形態であるゼミ形式を経験する事は、大学における主体的な学習を意識させる上で大きな意味があると考えている。従って本稿が意図しているのは、学部のカリキュラムの構成についての提言ではなく、現在のカリキュラムで行われている基礎ゼミナールをいかに活発かつ有効なものとするかという点についての考察である。1年次の学生にとってゼミは初めての経験でありなかなか討論するところまで至らないというのが現状である。そしてこれは程度の差こそあれ、本学部の3年生対象の専門ゼミナールにおいても共通する事であり、恐らくゼミを実施している多くの大学に共通の課題であろう。

本社会情報学基礎ゼミナールにおいても、ゼミの議論を活発にするべく毎年様々な試みがなされている。しかし、実質的に学生を指

MORITA Hiko  
YOSHINO Iwao  
GOTO Yasuhiro  
TAKEDA Tadashi  
TAKAHASHI Tetsuo

札幌学院大学社会情報学部  
日本学術振興会特別研究員  
北海道大学大学院文学研究科  
北海道大学大学院教育学研究科

”

導している指導員が大学院生であるという事から長くても数年程度で交代してしまうため、これまでの経験の蓄積がなされにくいという問題点があった。そこで、今回1997年度の森田担当の4つのゼミを例として取り上げ、ここでなされた個々のゼミの取り組みを紹介した上でそれを総括しておくことは、今後のゼミのあり方を考える上の判断材料を与えるものとなる。

今年度の森田担当のゼミを進めるに当たっては、同じく1年次に必修科目として実施されている「情報処理A・B」という科目との連携を意識した。「情報処理A・B」では、ワープロを使った文書作成、表計算ソフトを用いたデータ集計さらに電子メールやインターネットのホームページ閲覧等を経て、プレゼンテーションソフトを用いた発表の練習まで行っている。「情報処理A・B」では週に2時間をかけ、かなり徹底したトレーニングを行っているが、これら情報処理技術は、実際の目的に適用して初めてそれら技術の意義を認識するものであり、そうすることで本当の意味で身に付くものであろう。そうした点からすると、情報処理でトレーニングしたデータの収集や処理およびプレゼンテーションの技術を実際に生かす場として社会情報学基礎ゼミナールを捉え、両者の連携を密にする事が基礎ゼミナールおよび情報処理双方を活性化させる事につながると考えられる。そこで、今年度の森田担当のゼミにおいてはこのような観点から学生を指導するという申し合わせを教員および指導員の間で行った。すなわち、ゼミの議論を活発にするという目的に情報処理の技術をどのように活用する事ができるのか、という視点を指導上の一つのポイントにおいたのである。ここでは、特に電子メールおよびプレゼンテーションツールの活用に注目した。したがって、以下はこの点についても総括したい。

以下、第2章では、今年度の各ゼミの取り

組みを紹介し、それを踏まえて第3章において今年度の取り組みを総括する。同時に、ゼミをより活発なものとするための指針となる点についてもまとめ、今後のゼミへの提言としたい。

## 2. 今年度の取り組みの紹介

本章では、まず2.1~2.4の各節で吉野、後藤、竹田そして高橋が担当したそれぞれのゼミの今年度の取り組みを前期および後期に分けて紹介し、それらの有効な点や問題点等についてまとめる。そして、今年度特に意識した電子メールおよびプレゼンテーションツールの活用については、実際の活用実態を2.5節でまとめる。なお、竹田担当のゼミは当初別の指導員が担当していたが、事情で6月に辞める事になり、竹田はその後をそれまでのやり方を含めて引き継いだことを断っておく。

### 2.1 吉野担当ゼミの場合

本ゼミでは、前期は共通のテキストを使って各自担当の章をまとめて発表し、後期は自由テーマで発表をするという形式をとった。前期は、テキストを読んでよく理解し、レジュメにまとめてわかりやすく発表する、ということを中心的な目標とした。一方、後期は、自分の興味のある題材についてレジュメにまとめて発表した上で、問題点や各自の意見などを議論しあう、ということを中心的な目標とした。前期、後期のゼミ内容をこのような順番で行ったのは、1年生にいきなり自由テーマで発表させるのは大変ではないかと考えたからである。

#### 2.1.1 前期の取り組み

前期は、「サブリミナル・マインド」(下條信輔, 1996)という心理学の新書を各章2人ずつ割り当てて発表することとした。ゼミの最初の時間では、ゼミの目的や内容などについて学生に説明し理解を求めた後で、具体的な発表の方法や議論の進め方について次のよ

うな約束事を確認した。

- ① 発表者は、割り当てられた章についてレジюмеを作成し1時間以内で発表を行う。レジюме作成に当たっては、「見やすく、わかりやすく」を心がける。そのために、まず見出しに通し番号などをつけて階層構造を明確にさせる。そして、文章は箇条書きでまとめ、必ず図表を入れ、最後に参考文献を載せる。またレジюме作成にはできればワープロ等を使用する。さらに、テキスト中で簡単にしか触れられていない箇所やわかりにくい箇所については、関連する書籍を探して、レジюмеで詳しく説明する（特に図表等で）。
- ② 発表者はゼミの司会も行い、質問は各節ごとに区切って受け付ける。
- ③ 各時間ごと、事前に質問者（指定討論者）を2名決めておき、指定討論者は割り当てられた章をよく読んで、質問を考えてレポート用紙にまとめておく（ゼミ終了後に提出）。発表者が質問を受け付けたとき、誰も質問するものがないときは、質問者が責任を持って質問をする。
- ④ 成績は、発表内容や指定討論者としての働きもさることながら、ゼミにおける発言を重視するため、発言回数をカウントする。

第1回目の発表は、ゼミ生へ発表の見本を示すため、指導員である吉野がテキストの第1章の発表を行った。指定討論者はゼミ生全員とし、ゼミ終了後に質問用紙を回収した。この時は、やはり、事前にテキストを読み質問を用意してきた効果が現れて、質問等はよく出たが、議論にまでは至らなかった。

前期のゼミでは、発表者がレジюмеを作成して発表し指定討論者が質問する、という最低限の事柄は達成できた。しかしながら、テキストが難しかったせいか、レジюмеの完成度が不十分であり、質問もいわゆる単方向の

質問だけで“議論する”ということはほとんどなかった。特にレジюме作成に関しては上述のような約束にも拘わらず、テキストをまとめるだけに終始してしまい、関連する書籍からの説明や図表の引用は数名を除いてほとんど見られなかった上、見出しの通し番号や参考文献の記述などの形式的な事柄さえも守られない場合が多々見受けられた。これらの約束事は、ゼミの最初の時間に板書したのだが、ゼミ生は忘れてしまったのか、結局徹底していなかったということになる。この点、プリント等を配ってもっと徹底すべきであった。ゼミ中の発言に関しては、指定討論者以外からも相応の質問は出たが、専門用語の意味について尋ねる単純な質問が多く、また理由を尋ねる質問が出されたときでも発表者がそれに答えられない場合が多く、なかなか議論にまでは発展しなかった。発表者が答えられなかった場合は筆者が答える形になったが、発表者には、わからないところがないくらいに事前に参考文献などを当たってきちんと調べてくる、ということ徹底すべきであったと思われる。

以上、前期のゼミの反省点をまとめると、まず第一に、テキストがあまり馴染みのない心理学という分野であり、内容も豊富で理解が難しかったという点が挙げられる。このため、1年次の学生にとっては、参考文献を探すのが難しく、また内容を十分に把握しきれなかったものと思われる。それ故、身近な問題として議論するレベルまでいかず、わからない点に関する質問だけに終わってしまったのであろう。第二に、ゼミの最初に約束したことを徹底できなかったことである。時間がたつうちに、様々な約束事がおろそかになってしまったのだが、こうしたゼミ運営上のルールを徹底させるには指導者のかなりのエネルギーが必要である、という点を痛感した。筆者もつい妥協してしまったことを反省している。

### 2.1.2 後期の取り組み

後期のゼミは、各自が自由なテーマを発表した。夏休み期間にどのような内容の発表をするかを考えさせ、後期の第1回目のゼミのときに、そのタイトルを発表させた。テーマが広すぎる場合は、筆者が注文を出してテーマを絞るように指導した。発表テーマは、「超能力ははたしてあるか」、「ノストラダムスの大予言」、「ファッションと流行」といった個人的興味の話題、「オゾン層の危機」、「ダイオキシンによる汚染」、「車社会と環境問題」、「公害：危機に直面している海」のような環境問題、「飲酒について」、「メディア：私達と視覚メディア」のような社会問題や、前期に心理学のテキストを使ったことが影響したのか、「自殺心理」、「犯罪心理」、「ストレスが体に及ぼす影響と予防法」、「血液型と性格は関係あるのか」、「流行について」といった心理学的話題など、様々であった。

後期のゼミの発表にあたっては、前期に注意したことと同じような事柄を改めて注意したほか、発表で何を明らかにしたいか、何を議論したいかなどの「目的」、「結論」などを明確に意識してレジユメを作成するように指示した。また、テキスト等がないので、特に、図表は意識して多めに載せるように注意した。発表は30分、質疑応答は10分とし、発表者は30分間話せるだけの内容を準備する、ということにした。前期のゼミとは異なり、指定討論者はおかずに、質疑応答10分の間に全員で自由に質問や議論をすることにした。

その結果、発表者は自分自身の興味に基づいて、それなりに筋道を作って発表を行うことができたようであった。ほとんどのゼミ生は、30分とまではいかなかったが、平均で15分位の発表を行い、レジユメは図表なども必ず入れて5～6ページ位で仕上げてきた。しかしながら、ほとんどの発表では、目的が不明確であり、ただ、2,3の文献を読んで、調べた事柄をまとめただけの発表に終わってい

た。そのため、個々の具体的な事例についてはよくわかるものの、それらがまとまっていないために全体として何を言いたいのかさっぱりわからなかったり、抽象的な議論に終始して具体的な話が見えなかったり、古い文献にだけ頼ってしまったために現時点での議論につながらなかったり、せっかく社会問題について発表しても発表者自身の問題意識が希薄なために将来の課題についての意見を全く持ち合わせていない、などという発表が多々見受けられた。このため、発表内容自体が理解できないために質問や議論が全く起きなかったり、現時点の問題点や将来の課題について議論したくても、判断材料がなくてできない、ということになってしまった。

後期のゼミでは、予想に反して、質問や議論は前期よりもさらに少なくなってしまった。そのため、当初の目標であった“議論すること”はほとんど達成できなかった。原因として考えられるのは、第1に、多くの発表では内容が理解しやすいために内容に関する質問等が出にくかったことである。第2は、多くの発表者があまり深くは調べていなかったため質問しても答えられない場合が多く、そのため、ゼミ生の中に「質問しても仕様がな」という雰囲気形成されてしまったことである。第3は、上述のように発表者自身の問題意識が希薄な場合だと、筆者自身の方から議論をしかけても、それに対する有効な意見を提供できないため、そこでやりとりが止まってしまったことである。第4は、後期の発表では、一通り発表が終わってから質疑応答するようにしたことである。発表が全部終わってからでは、質問内容を忘れてしまったり、また改めて発言すること自体に抵抗が出てきてしまったりするため、質問することが抑制されてしまったものと思われる。第5は、筆者自身が、活発な議論が出るような有効な意見や質問をできなかったことであり、これについては大いに反省している。結局、

多くの場合で、発表者と指導員である筆者だけが発言をして、他のゼミ生はほとんど発言をしないという状況に陥ってしまった。前期のゼミでは、指定討論者をおいていたのでそれほどでもなかったが、後期ではこうした傾向が強くなってしまった。自由テーマで指定討論者になるのは難しいが、今後は考えてみるべきかもしれない。また、司会者を発表者とは別の学生にやらせれば、少なくとも発言する学生の数は増えるわけであるし、学生自身がゼミを作るという意識にもっていったかもしれない。

総括すると、後期のゼミでは、最初のオリエンテーション（方向付け）が不十分であったと考えられる。もっと多くの時間を割き、プリント等も配って、発表の仕方について十分に指示をすれば、もっと中身のある発表になり、議論等も活発になったかもしれない。各自のテーマの設定に関しても、指導員が問題点を明確にしてやるなど十分に助言を与えるべきだったし、前期と同じように指導員自ら発表の手本を見せるべきだったと考える。一番重要なことは、発表者自身が、発表の目的を明確に理解し、それについて興味を持って詳細に調べてくることであろう。

### 2.1.3 1年間の総括

何事も、物事ははじめが肝心というが、このゼミも然りかもしれない。指導員が、ゼミの途中で口頭で適宜指示したようなことは、なかなか学生には伝わらないものである。4月のゼミ開始時に、このゼミが非常に重要であること、発表にあたっては相当の時間を割いて準備する必要があること、レジュメの作成の仕方、議論の進め方、などを詳しく説明して納得してもらう必要がある。そして、約束事は徹底させるべきである。発表の見本を示すことも重要であろう。こうしたことを行わなければ、学生は、結局、必要最低限のことしか行わず、消化不良な内容の発表になってしまったり、ゼミに無関心になってしまった

りして、中途半端なゼミになってしまうであろう。

## 2.2 後藤担当ゼミの場合

後藤が担当したクラスは、男13名・女3名の16名であり、うち2人が2年生であった。授業開始前は、学生がどのような事項に関心があるのかということや、学生がどれくらいの能力を持っているのかということなどについての具体的な予想が立てにくかった。また、どの程度学生を指導すべきか、すなわち、できるだけ具体的に細かく指示を出した方がよいのか、それとも可能な限り学生の自主性に任せるべきなのかということについても見当が付きかねた。このため、前期は、指導員の側である程度の拘束を設け、その課題を学生にこなさせることによって「ゼミ」に必要な基礎事項(レジュメを作る、人前で発表する、など)を身につけさせることにした。同時に、指導員の側としては、学生一人ひとりの様子を詳しく観察することを目的にゼミを進めることにし、後期のゼミ運営方針は前期の結果を踏まえて決定することとした。

### 2.2.1 前期の取り組み

上述の理由から、前期は後藤が指定したテキスト「サブリミナル・マインド」(下條信輔, 1996)を用いてゼミを進めることにした。具体的には以下の運営方針にしたがってゼミを進めた。

- ① 各章をそれぞれ2人で担当させる。
- ② 一人45分目安で、各章の内容をわかりやすく発表する。
- ③ 発表のために、最低限レジュメを準備する。
- ④ 発表の途中、随時質問は受け付ける。  
それに加えて、各章にあらかじめ「質問者」を各2人選んでおき、質問をさせる。
- ⑤ 担当者がどのように分担するか(完全に2分割する、調べる人と発表する人とに分ける、など)は学生に任せる。

一人あたりの担当箇所および所要時間を明

確に指定したおかげで、当初の計画通り全ての学生に一度づつ発表者と質問者を経験させることができた。学生は、少なくとも「ゼミとはどのようなものか」ということについて把握することはできたと考えられる。しかし、残念ながら、改善すべき点多々目についた。たとえば、ゼミに積極的に参加するという態度が見られない、レジュメのコピーに手間取り授業開始に間に合わない、大半の学生の発表資料がテキストの丸写しであり、関連する書籍などにあたるということをしていない、議論がほとんどできない、などといったことである。

これらの点については、学生自身も自覚していたようである。前期末のレポート課題として、ゼミについて感じたことをレポートとして記述させたところ、学生自身も自分たちの授業への参加態度について反省している内容の意見が散見された。たとえば、「発表の準備期間が短か過ぎた。もっと簡単なものだと考えていたが、やってみたら予想以上に時間がかかるものだということがわかった」、「わからない言葉を、調べないでそのままにしまった」、「積極的に発言できなかった」、「ゼミというものがどういうものかわからなかった。高校の授業の延長のような気がして、つい受け身になっていた」、「自分ではきちんと準備をしたつもりであったが、いざ発表となると緊張してしまいうまく説明できなかった。自分の言葉で説明しようとしたが、気がつくともレジュメの棒読みになってしまった」などというようのものであった。

### 2.2.2 後期の取り組み

後期の最初の時間で、前期末に提出させたレポートを各人に返却し、後期は自分の反省点を克服することを最大の目標とするように指導した。このころになると、学生たちも大学生としての自覚ができつつあったので、後期は、発表のテーマの選択や発表の進行の仕方、プレゼンテーションの方法などを、学生

の自主的な選択に任せることが可能であると判断した。

そこで、後期は可能な限り学生に任せることにし、事前の指導は必要最小限のことだけにした。具体的には、後期は以下の運営方針にしたがって進めた。

- ① 自分自身で日頃から興味を持っている事項を取り上げ、皆にわかりやすく説明する。
- ② 発表時間の制限は特に設けない。
- ③ 発表方法についても限定せず、できるだけレジュメ以外の方法も考える。

後期のゼミを開始するにあたって、指導員の側として特に工夫した点は、発表者の順番の決定、発表計画書の作成、そして電子メールの活用の3点である。

まず第1の「発表順」については、前期の発表の様子を観察した結果、発表順序が後半の学生は、自分より前の人発表の仕方に、良くも悪くも影響されるということがわかったことによる。そこで、前期末に提出させたレポートで、「前期の発表がうまくできたと思う」という自己評価した学生から発表を行うように指示したのである。こうすることにより、プレゼンテーションが苦手な学生は得意な人のそれを見て参考にできるであろうし、その結果、ゼミ自体にも議論をする雰囲気生まれると期待した。

次に第2の「発表計画書」も、前期の反省から生まれたことである。やはり前期の指導を通じて、発表の内容についてあらかじめ知っているかどうか、ということが、議論の質や内容に大きく影響することがわかった。そこで、後期の授業の最初の時間に「発表計画書」を作成させ、最初の授業で全員に発表させた。発表計画書とは、発表テーマ、発表内容、調査方法、発表方法などについて、できるだけ具体的に記述させたものである。これは、学生に自分自身で調べて発表するという自覚を持たせ、同時に、発表内容を発表者

以外の学生にも事前に知らせておくことによって、興味をあらかじめ活性化させて活発な議論ができるようになるということを期待したものであった。

最後に第3の「電子メール」については、当初は、ゼミ中に足りなかった議論や分からなかったことの質問などに利用するということが目的としたが、学生に「電子メールを毎日確認する」というような習慣がなかったために、残念ながら議論をするというまでには至らなかった。そこで、後藤ゼミでは、次の発表担当者に、自分の発表のタイトルと内容、それに要望（たとえば、〇〇についてどう思うか考えてきて欲しい、〇〇という本を読んできて欲しい、など）ということを中心にリストに流させるようにした。本年度は、毎週メールを使用する「情報処理」の時間が基礎ゼミナールの前日であったため、学生はあらかじめテーマについて知ることができるようになり、第2の「発表計画書」と同様に、事前に興味を活性化させることにつながった。

こうして始まった後期の授業であったが、上記の工夫もあり、前期とは打って変わって非常に活発な議論がなされるようになった。また、発表の内容も高度なものが見られ、指導員としても参考になるものも多かった。その中でも特に印象に残ったものとして以下のようなものを挙げることができる。

#### i. 「新世紀エヴァンゲリオン」について

社会現象にもなったアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」についての発表であった。発表者は、レジュメの他に、自分で編集したビデオを用いてプレゼンテーションを行った。内容は、アニメの紹介に加えて、なぜこれほどのブームになったのかということについて、様々な角度から概観したものであった。発表には、いわゆる「オタク」といわれるような人々に見られる、過度の思い入れは全くない冷静なものであった。ゼミ終了後のアンケー

ト調査では、もっとも印象に残った発表であったという意見が聞かれ、「発表を聞くまでは『この年になってもマンガに興味があるのか』と思っていたが、発表を聞いているうちに自分も見たくなってきた」、「内容を全く知らない人にこの映画を見たいと思わせるような発表をしていたのが素晴らしかった」などという意見が見られた。

#### ii. 犯罪と人権

テーマ的には硬いものであったが、非常に高度かつ白熱した議論をすることができた。この発表は、発表担当者が明確な自分自身の意見を持っていたために、それに対する賛否の意見が出やすかったという特徴があった。また、ちょうど神戸の連続通り魔事件の容疑者少年が捕まった時期であったこともあり、学生も関心が高かったようである。

#### iii. 小室哲哉はなぜ売れているのか

小室哲哉プロデュースのアーティストが日本の歌謡界を席捲しているが、その理由についての発表であった。一般的に指摘されていることに加え、他の音楽プロデューサーとの比較も行っていた。テーマの性格上、発表者自身の明確な意見というものは少なかったが、聞いている学生にとっては馴染みのあるテーマであったために活発な意見がでた。後半はやや芸能ネタの発表会のような雰囲気になってしまったが、全体的には活気のある発表であった。

#### iv. スウェーデンについて

発表者が憧れている国スウェーデンについての発表であった。政治・経済から文化や風俗までの幅広い内容であった。この種の発表は、ともすると観光ガイドのようになってしまいがちであるが、本発表はバランス良く各分野が紹介されていた。学生たちの関心は特にスウェーデンの福祉政策に集まっており、「年を取ったら移住したい」といったような意見も聞かれた。また、発表の大きな特徴として、スウェーデン人の音楽プロデューサー・

トーレヨハンソンが手掛けた曲を BGM として流しながら発表を行ったということあげることができる。BGM としてはやや適切ではない音楽もあったが、異国の雰囲気を感じられるように工夫されていた。

この他に、アンケート調査で学生が印象に残った発表として挙げたものに、シートベルト装着義務の是非について述べたものや、ホスピス、エイズ問題について取り上げたもの、睡眠について科学的に調べたもの、ホームレスについて日米の比較を行ったものなどがあつた。

### 2.2.3 1年間の総括

上述したように、後藤が担当したクラスでは、前期から後期にかけて大きな変化が見られた。これにはいくつかの原因があると考えられる。まず最も大きな要因としては、自分の好き（得意）なテーマの発表をすることができた、という点が挙げられる。前期は、自分の興味とは無関係の内容の発表を行ったわけであり、モチベーションが上がらなかつたと考えられる。「指定されたテキストが難しすぎた」という感想もあつたが、学生の潜在能力や後期の研究発表のレベルを考えると、テキストの内容について全く理解できないとは考えにくい。テキストの内容が難しいというよりは、むしろ内容に興味を湧かなかつたために理解しようとする気にならなかつたのであろう。また、ゼミのメンバー同士がうちとけてきた、ということも大きな理由であらう。遠慮せずになんでも言い合える雰囲気になつたことは、活発な議論のために役に立つた。

こうした学生を取り巻く環境の変化の他に、学生自身の変化についても指摘しておきたい。後藤が担当したクラスは14名が1年生であつたが、彼等は後期になるころになつて、やっと「大学とは」「大学生とは」というものがわかつてきたのではないだろうか？ 高校生から大学生になつた時の変化は、小学生から中学生または中学生から高校生になつた時

の変化とは比べものにならないほど大きなものである。高校までは、授業の形態がほとんど受動的なものであり、評価も「正解か不正解か」という観点からのものが中心であつた。したがつて、自分の意見を発表するということは、常に「あつている」もしくは「間違つている」という判断を下されることになり、「自分の意見を述べる」ということに慎重もしくは臆病にならざるを得なかつたのであろう。もちろん大学でも同様の評価が行われる場合もあるが、少なくとも「社会情報学基礎ゼミナール」においては自由に自分の意見を述べることを求めている。大学での「授業」が高校までのそれとは違つ、といったことに学生自身が気づいたことが、ゼミでの議論が活発になつていった理由の一つであり、こういった点からは本ゼミナールの目的の一つはある程度達成できたと考えられる。

### 2.3 竹田担当ゼミの場合

筆者は、前期の後半より前任の指導員より引き継いで受け持つたため、ゼミの進め方は全面的にその方法を踏襲した。前期・後期ともに、テキストは使用せず、各自の自由テーマの報告によつてゼミを進めた。前年度のゼミで取り上げられたテーマを参考にし、身近で、各自の関心のあるテーマを学生自身が各期のはじめに設定した。早い時期からテーマを設定させておくことによつて、日頃から関連する情報を収集できると考えたからである。

#### 2.3.1 前期の取り組み

取り上げられたテーマは「食品の安全性について」、「書籍の流通について」、「UFOと宇宙人」、「携帯通信機器が与える影響」、「ノストラダムスについて」、「ゴルフの話」、「死刑の必要性について」、「日本の食文化について」、「ゴミとリサイクル・プラスチック廃棄物について」、「被服と衣生活について」、「捕鯨について」、「火星について」など、様々な内容であつた。



ゼミの進行に関しては、司会は次回のレポーター、記録は前回のレポーターが担当した。1講(90分)において、2つのレポートを取り上げた。途中で5分程度の休憩を挟み、1つのレポートは35~40分で行った(議論が盛り上がった場合は延長した場合もあった)。進行は、はじめに、10分程度レポーターの報告がレジメに沿って行われる。その後、レポートに対する質問を受けつけ、その後議論へと移行する(レポーターは2,3の論点をレジメ内に示してある)。

担当した初期の頃は、筆者はどのような役割を果たすべきかを模索していた。筆者がこの授業において、主な目標としたことは、「1. 自分の意見を発言できること」、「2. レポートの作成の仕方」、「3. 司会の役割の認識」の3点であった。

1に関しては、冗談に近く議論と関係の無い意見であっても、その話題によって、話を盛り上げ、学生が気軽に発言できる雰囲気づくりを心がけた。この点は成功し、全員が活発に意見を出せるゼミであった。

2に関しては、参考文献の探し方(書籍、新聞、インターネットなど)と記載方法、レポートの内容、論点の設定方法などを指導した。レポートの内容に関しては、テーマを取り上げた理由や問題意識をはじめに述べ、次にそのテーマの歴史や社会背景、問題点など具体的な内容を述べ、最後にまとめと論点を述べさせた。レポートが、2つの対立する意見を紹介してある場合(死刑の存置か廃止か、公共施設では禁煙とすべきかどうかなど)は、学生たちはどちらの立場をとるかを考えやすく、議論が活発になった。また、あえてディベート形式で議論を行わせたこともあった。

3に関しては、司会がゼミにおいて重要であることを強調した。ある意見に対する反対意見を引き出したり、議論となり得る面白い意見を見逃さないように指導した。この点に関しては、学生も認識し、「(司会の)見本を

見せてほしかった」という感想文もあった。

そして、全体としては、筆者はあまり口を出さず、議論の成り行きを見守り、学生が主体的に取り組めるようにした。

### 2.3.2 後期の取り組み

後期においても、前期と同様な形式でゼミを進めた。

後期の後半においては、パソコンのプレゼンテーションツールを活用した発表が8件ほどあった。この点に関しては、2.5節で述べる。

レポートの内容では、後半の方が少し、手を抜いている傾向が感じられた。それは、後期が前期の単なる繰り返しとなってしまっていたためであろう。前期の内容を発展させたり、テキストを使用するなど何か変化・発展する内容を工夫すべきであった。その意味では、後期の後半に行ったプレゼンテーションツールの利用は、新鮮さを与えるものになったのであろう。

### 2.3.3 1年間の総括

本ゼミは1年間を通じて、各自が気軽に発言でき、比較的発言の多いゼミであった。この点、自分の意見を発言するという第1の目標はほぼ達成できたと思われる。第2の目標の「レポートの作成の仕方」については、学生の感想文をみると、反省点として「自分が何を伝えたいかを明確にすること」、「議論をしやすい論点とする」などといった回答が数多く挙げられ、レジメの書き方に関する注意点などは、多くの学生が認識できたと思われる。最後に「司会の役割の認識」については先に述べた通り学生自身もよく認識しており、実際、議論の質および量はレポートの内容のみならず、司会の進行方法によっても大きく左右される傾向が見られた。

### 2.4 高橋担当ゼミの場合

前期は、テキストを決めてその内容に沿った報告をしてもらい、後期は、ゼミ生個人々に、それぞれが関心を持つテーマについて自

由に報告してもらった。ゼミの目標は色々考えられたが、1年間通して強調したことは、議論をする力をつけることである。そのため、報告担当者には、必ず論点を提示することを義務づけた。以下に、学生に対して実施したアンケートの結果も見ながら、前期・後期に分けて、ゼミの進め方をより詳しく紹介する。

#### 2.4.1 前期の取り組み

前期に選んだテキストは、『さらばアリストテレス — エピソード科学史異聞 —』（金子務，1993）である。本書は、副題にあるとおり、科学史上のエピソードを紹介したものである。1つの話題が数頁で完結しており1回のゼミで扱う分量として適当である、どの話題から読むことも可能であり学生が自分の担当したい部分を選択できる、などの理由により選定した。

前期にテキストを使用したことそれ自体については、特に問題はなかった。ゼミ終了後に実施したアンケート結果にも、「レジュメ書きに慣れるためにテキストを使用した方が良い」という回答があった。しかし、テキストのテーマについては、学生からは良い評価を得られなかった。科学史がテーマであったが、「哲学みたいなテーマは、関心のない私にとってはつらかった」のように、テキストの内容を哲学であると捉えた回答が3名に見られたほか、「本の内容が難しくレジュメをつくるのが困難であった」、などほぼ全員が批判的な回答をしている。「テキストのテーマを科学的に考えるのは楽しかった」のように、テキストに好意的な回答を寄せたのは1名だけであった。自然科学がどのように発展してきたか、また、高校までは暗記の対象であった科学史の背後にどのような人間像があるのかについて興味を持ってほしいという筆者らの思惑は、伝わらなかったようである。

このことから、前期のテキスト使用は良いが、そのテーマ選びは慎重にならなければならないといえる。1回目のゼミの時に学生に

希望を聞くという方法も考えられるが、ゼミがどのようなものか想像できない段階では、希望が出るとは考えられない。したがって、学生がどのようなテーマに関心をもつかについては、現状では、ゼミ担当教員・指導員の経験的知識を蓄積してゆくしかないであろう。ただし、学生にとって苦手な分野のテキストを選んだことによる副産物もあった。苦手であるからこそ、他のゼミ員からの質問にしっかり答えられるようにと、参考文献探しに一生懸命取り組む様子がかがえたのである。そして、このことは、後期へとつながっていった。

具体的なゼミの進め方については、1回のゼミにつき、2名の報告担当者をおき、同じ1話に対して、別々にレジュメを作成してもらった。レジュメの内容は、本文の要約と、本文の内容に関連して調べた事柄、それから論点である。1名ではなく2名おいたのは、論点が多いほど議論が起り易いと考えたためである。なお、報告担当者は、協力して司会を務めることにした。また、別の2名を指定討論者として1週間前に指名しておき、ゼミ中に質問する内容を書いてきてもらった。その理由は、述べるまでもないだろう。ゼミでよくある光景の1つは、報告者がレジュメを読み終えた後、誰も発言せずに沈黙が続くことである。指定討論者には、こういった場合に質問をし、議論の火付け役になってもらうことを意図したのである。しかし、議論に至る場面はほとんどなかった。指定討論者が、文字通りの討論者としての役割を果たせず、単なる質問担当者になっていたためである。科学史研究の視点から、面白いと思われる質問が提示されたことも少なくはなかった。しかし、質問に対する報告担当者の答を聞いて、すぐに「わかりました」と返事をするのが多く、それ以上話が進まない場面が多かった。それでも、報告担当者2名の出す論点と指定討論者2名の出す質問とを合わせて、10個程

度の話題が毎回提示されているわけである。それらについて話を進めるだけでも、1回90分のゼミは忙しく過ぎてゆき、沈黙の時間はあまりなかったといえる。

#### 2.4.2 後期の取り組み

続いて、自由テーマ報告となった後期についてであるが、1回のゼミで1～2名が報告することにした。報告担当者がレジュメに必ず論点を盛り込むことや司会も務めることなどは、前期と同様である。しかし、自由テーマ報告の性質上、当日にならなければ何の報告かがわからないため、指定討論者はおくことができなかった。それでも、前期から比較的積極的に発言をしていた学生が、他のゼミ員の発言を引き出すような質問を出すことが多くあった。アンケートにも、「楽しいことやみんなが気になることばかりを話して、少しでも空気をなごませて誰もが話しやすい場を作ろうとしていました」という回答があった。ただし、前期と同様に、議論と呼べるレベルに到達することは多くはなかった。1つの論点について、司会者が一人ひとりを指名して機械的に意見を求め、全員が発言を終えると次の論点へ、という場面が少なからず見られた。自ら手を挙げて発言するのは、毎回決まった5名ほどの学生しかいなかった。もっとも、指名されたからとはいえ発言はするわけであり、ゼミ員全体の発言回数やその質は向上したといえる。「積極的に質問などをあまりできませんでしたが、前期よりはできるようになったので良かった」と回答した学生がほとんどである。そうなった理由としても、ほぼ全員が、前期と比べて「テーマが自分の身近なものになった」ことをあげていた。

11月12日のゼミで全員の自由テーマ報告が一巡したため、11月19日からの残り4回では、1回目の報告時の論点をより膨らませあるいは深めることを中心にして、最終報告をしてもらった。1名の報告時間は15分、質疑応答時間5分の合計20分とし、1回につき

3～4名が報告した。各人が約3か月の間に調べたことを持ち時間のなかで表現するわけであり、1年生なりのゼミ論発表会を目指したのである。時間の関係上、最終報告においては、それまでのように議論することを目標としたのではなく、自分の考えをいかに上手に伝えるかという、プレゼンテーションの側面を重視した。ここで、前期のうちに図書館の利用法や文献検索の方法を身につけていた成果が十分に顕在化し、最終報告会のレジュメは高橋の予想を上回るできとなったのである。

なお、学生が自分で選んで報告したテーマは、「日本映画ブームについて」、「電磁波について」など、自分が日頃興味をもっている事柄について調べた、「～について型」のものが多かった。その一方で、社会問題や環境問題など現代社会が抱える困難な問題の本質を探ることに果敢に挑戦し、なんとか自分の意見をまとめてみようとする優れた報告もあった。「『ガン告知』についてのレポート」、「過熱化するマスコミ報道」、「Atomic[原子力発電所の問題に関するレポート]」などは、それぞれの問題に関わる対立する見解を丁寧に整理した上で、最後に自分の見解を述べているという点で、他とは一線を画する内容を有していた。

#### 2.4.3 1年間の総括

前期のテキストではその内容に多くのゼミ生が不満を持っていたものの、ここで行った疑問点や関連事項を資料・文献に当たって調べるといったトレーニングは後期になって十分に活かされた。この意味でテーマ内容の選定には工夫を要するものの、前期にテキストを使用する事は十分に意味があると思われる。また、後期における自由テーマの発表においても、指名による発言が多かったものの、議論の質は前期よりも向上した。

以上1年間の総括すると、高橋担当ゼミでは、発言者の数や発言の量を考えれば、1年

生のゼミとしては一応の合格点が出せるのではないかと思われるものの、重点を置いた「議論をする力をつけること」という目標の実現には距離があった。このように、発言による自分の意見の表明という点では物足りなかったが、その一方で、レジュメの作成という点では、予想以上の成果があったといえる。

## 2.5 電子メールおよびプレゼンテーションツール活用の実態

1で述べた通り、森田が担当する4つのゼミでは、ゼミの議論を活発にするために、同じく1年次の必修科目である「情報処理A・B」でトレーニングした情報処理技術を積極的に活用することを試みた。本節では、その内特に電子メールとプレゼンテーションツール(Power Point)の活用を試みた結果、それがどの程度実際に活用されたのか、その実態について述べる。なお、電子メールおよびプレゼンテーションツール共、ゼミでの活用を開始したのは後期中頃になってからである。

### 2.5.1 電子メール活用の実態

電子メールについては、指導員や教員と学生との1対1の送受信の他に、各ゼミ毎にメーリングリストを立ち上げ、ゼミ生がメールを通じて共通の話題について議論できる環境を整えた。

しかし、いずれのゼミでもメール上で議論を継続的に行うという段階までには至らなかった。その主原因は学生に日常的にメールをみるという習慣が根付いていないことにある。森田担当の4ゼミの学生を対象にしたアンケート調査によると、全体の約8割が1週間に1度程度しかメールをみていない。一方、毎週の「情報処理A・B」の実習においては出席メールを出すことが義務づけられていることを考えると、このことは、ほとんどの学生が情報処理の実習以外ではメールを使用していない事を意味する。もっともこれは学生の側ばかりに問題があるのではなく、現在実

習室の使用スケジュールが過密で、日中の空き時間にはなかなかパソコンを使いつらい状況であることも影響しており、アンケートの自由記述でも少なからぬ学生がその点を指摘している。空き時間に自由に使用できるパソコンの数が増える、あるいは自宅のパソコンから電子メールを出せる等、メール使用環境が今後改善されればメールの使用頻度は大幅に増えるものと思われる。

このように現状では、議論をできるだけ学生のメール活用度は高くはないが、簡単な連絡事項等の一方向の通知には十分役立っている。実際、後藤および竹田担当ゼミでは、翌週の発表テーマをメールで通知することで、事前に議論内容を周知させゼミの議論をスムーズに進める上で役に立っている。特に竹田ゼミでは、指導員の指示の徹底により全員が一度はゼミのメーリングリストに投稿しており、ゼミに関する連絡事項をメールを通じてやりとりするという習慣がほぼ身に付いたように思われる。

また議論にまで至らなくても、次の高橋担当ゼミの例のように、メールの使用がゼミの議論の活性化につながった例もある。高橋担当ゼミではガン告知問題についての報告があった日の夜、告知問題に対する自分の意見を電子メールで送る旨を、メールにより指示したことがある。1週間後に設定した締め切りまでに、約半数の8名から返事があり、高橋が到着分をまとめて全員に転送した。数字の上では、約半数からは応答がなかったということになるが、ゼミ中にはほとんど発言しない学生が、しっかりと自分の見解を述べているという例も見られたことから、後のゼミの進行に良い影響を与えたことは確かである。この後、他のゼミ生が、その学生に議論をもちかけて、発言を引き出そうとする場面が増えたように思われる。学生にも様々な個性があり、ゼミ中に発言する事は苦手でも文章でなら自分の意見をきちんと述べられる

という学生もいる。上の例は、メールの活用がそのような学生の自己表現のきっかけになる可能性がある事を示唆している。

## 2.5.2 プレゼンテーションツールの

### 活用実態

アンケート調査の結果によると、ゼミの発表をプレゼンテーションツール（ここではPower Pointを指す）を用いて行うことに関しては8割強の学生が肯定的であった。しかし、実際にPower Pointを使用して発表を行ったのは竹田担当ゼミのみでその他のゼミでは使用されなかった。多くの学生が、実際に使用しなかった理由として、準備に手間がかかるという点を挙げている。確かに、操作に慣れない内は作成にかなりの手間がかかるのは事実である。「情報処理」で一通りの操作手順をマスターしたばかりの段階では、このような受け止め方が学生の実状なのであろう。なお、ここでも、実習室の高い稼働率によるパソコン不足が学生より多く指摘されていた。実際、ノートパソコンを貸与してくれるならPower Pointを使って発表資料を作りたいと申し出た学生もいた。この点使用環境の改善を考える必要があるだろう。

それでは、以下に、実際に活用した竹田担当ゼミの事例をみてみよう。

竹田担当ゼミでは、後期の後半よりプレゼンテーションツールを活用したレポートを8件行った。Power Pointを用いた発表については、竹田自身も過去に学会においてそのような発表がなされるのを見て大いに関心を持っていた。また、学生も「情報処理」の実習において、その活用を学習しており、それを利用して発表したいという者が予想以上に多かった。

Power Pointを用いた発表を始めるに当たって、まず竹田自身が第1回目に自分の研究テーマを報告したが、それによって、発表のイメージができたと思われる。学生の発表は10枚程度のスライドによって、文字やグラ

フ、写真を取り込んで行われていた。初めてにしては、なかなかの出来栄であった。しかし、Power Pointを使用することばかりに気を取られ、内容が不十分であったり、論点への発展性に欠けるものもあった。この点、指導する側の適切な指導が必要である。

学生の感想文をみると、「文章が大きい文字で簡潔な文章で書くのでとても見やすく良い」、「写真や図なども使ってビジュアル的により分かりやすくなるので、社会にでてからもいろいろと役に立つと思う」、「発表にインパクトがある」といった肯定的な意見の一方で、「準備に時間がかかる」、「見づらい」、「議論が画面を見ながら行うので行いづらい」、「レジュメのように後から自由に再度みることができない」、「フロッピーに入れる容量の大きさに気をつけなければならず、発表内容が不十分なものとなった」、「自分の言いたいことを表現するために、絵（画像）ばかりを取り込んでしまい、他者には難しすぎた」などという問題点や反省点も述べられていた。これらの意見をみると、プレゼンテーションツールの問題点も一定程度理解できているように思われる。

以上、プレゼンテーションツールに関しては、多くの学生がその有用性を感じつつも、準備に関する手間等から実際に使用することにはためらいがあるのが現状である。しかし、指導する側が熱心に勧め利用のきっかけを与えると、竹田担当ゼミのゼミ生のように皆一定レベルの発表ができるようである。

## 3. 今年度の取り組みの総括と今後のゼミへの提言

以上、4つのゼミそれぞれの今年度の取り組みをみてきた。面白いことに、同じ1年生であるにも拘わらず、それぞれのゼミが固有の特徴を持っていた。これらの特徴は担当した指導員の個性と所属するゼミ生の個性とが織り成したものであろう。この事はまた、ゼ

ミの指導が一律にできるものではない事を示唆している。まさに学生の反応を見ながらそれに適合するよう指導する事が、指導する側には求められている。そして今年度の取り組みとその結果には、そのような学生に適合した指導を実現するためのヒントが含まれていると思われる。以下、本章では、4つのゼミの取り組みを総合的に総括し、そこからゼミをより活気のあるものにするための指針となる点を拾い上げ、今後のゼミへの提言としたい。

### 3.1 ゼミの進め方

まず、ゼミの進め方については、指定討論者や司会者をおくなど、各ゼミで様々な工夫を試みた。これらの試みは学生の発言の機会を増やし、ゼミへの参加を促すという意味で概ね有効であったと思われる。

特に、竹田担当ゼミで実施したように報告者とは別に司会者を置くことは、学生の自主性を高めるという意味で効果的である。同僚であるゼミ生が司会者になりゼミの進行をコントロールするので、ゼミ生の間に自分たちで作るゼミという雰囲気形成の一助になったように思われる。そして慣れてくると、司会者がある事柄について皆の意見を求める際に、ただ無作為に指名するのではなく、その事に関心がありそうなあるいは意見を持っていると思われるゼミ生を指名するようになって来た。このように、司会者を経験する事は、全体の議論の流れをつかみ、必要に応じて意見をまとめるということの格好のトレーニングになったものと思われる。もっとも、このようなやり方が軌道に乗るためには、指導する側の心配りが必要である。議論になってもそれを直接的に方向付けするのではなく、司会者をサポートするという姿勢で発言し、議論を誘発するよう努める等の工夫が必要である。

次に、吉野、後藤そして高橋担当ゼミの前期において行われた、発表の分担を2人で行

わせる試みも面白い試みではあったが、実際には2人がほとんど関連性を持たずに独立な2つの発表として終わる事が多々あった。それでももう一人の発表者の発表内容を意識する事から、いい意味での緊張感が発表者に生まれるというメリットはある。2人の発表者同士の論点がもう少し絡み合うような工夫がなされれば、ゼミの議論を活発にするために有効となると思われる。

### 3.2 テキストか自由テーマか

次に、テキストを決めるか、あるいは、自由なテーマで行うかについて各々の長短について考察してみる。テキストを使用してゼミを進めたのは吉野、後藤そして高橋の3つのゼミの前期においてである。一方、当初もう一人の指導員であった大高氏の意向により、大高担当のゼミは最初から自由なテーマで行う事にした。そしてこの形式は前期途中で引き継いだ竹田に継承される。

まず、テキスト使用に関する学生の感想をみると、吉野および後藤担当ゼミで使用した「サブリミナル・マインド」(下條信輔, 1996)、高橋担当ゼミで使用した「さらばアリストテレス ―エピソード科学史異聞―」(金子務, 1993) 共、評判は芳しくなく概ね否定的であった。しかし、これはテキストを使用した事自体の問題ではなく、内容に興味を持てなかった事によるものと思われる。そのため、議論がなかなか盛り上がらないという事態を招いた。とはいえ、ゼミ生全員が興味を持てるようなテキストを選定する事は現実的に困難である。もちろん学生が興味を持てる様な内容となるように最大限配慮する必要があるが、むしろ前期の段階では、書かれた内容を理解しそれを分かりやすくまとめる、そして理解できない場合は関連の文献に当たって調べるといような基礎トレーニングの場と捉えてもよいように思われる。高橋担当のゼミのように、テキストに対する評判は悪くても、関連文献に当たって徹底的に調べると

いうトレーニングを辛抱強く続ける事が後期のゼミにおける議論の発展・深化につながった例を考えると、テキストを用いる事は決して悪い事ではなく指導次第で効果は上がるものと思われる。今年度の経験では、前期にテキストを用いて基礎トレーニングを積んでから、後期に自由テーマで行うという形式は基本的に有効であったと思われる。

一方、最初から自由テーマで行った竹田担当ゼミの場合は、学生自身が関心の高いテーマを選択するので早い時期からゼミ生の発言は活発であった。そして自然にゼミの雰囲気も打ち解けたものになった。これにはもちろん指導員の指導によるところが大きいのであるが、自由テーマで行う事は、ゼミ内に発言しやすい雰囲気を形成するのに有効であろうと思われる。しかし、後期も同様な自由テーマ形式で行うと発展性に乏しく、学生の興味関心もやや薄れる傾向がある。竹田担当ゼミで後期にプレゼンテーションツールを使用した学生が多かったのは、学生がゼミに変化を求めた事も背景にあるのかもしれない。早い時期に学生が発言する雰囲気を形成するには自由テーマが有効であるが、2巡目以降は前回発表したテーマについてさらに掘り下げる、あるいは共同で一つのテーマについて調べる等の工夫が必要である。ただ興味のあるテーマのつまみ食いには終わっては、学生自身もゼミに対する興味を維持できないと思われるからである。

以上、今年度の経験からすると、1年を通してあるテキストに基づいてゼミを行うという事は、学生の関心を維持するという点で非常に困難である。また同じく一話完結の自由テーマ形式を1年間通すことも発表内容の発展性が乏しいという点で有効ではない。そこで、両者を適当に融合した形式が現実的には有効であろうと思われる。今年度は3つのゼミで前期はテキスト後期は自由テーマという形式で行い、相応の成果を上げた。一方、次

のようにその逆の進め方もあり得る。筆者らの経験では、学生は何か一つは関心の高いもの、あるいは他人よりも詳しい事柄を持っているものである。そして少なからぬ学生が、それを他の人に認めてもらいたいという欲求を持っている。その自己表現の機会を与えるという意味で、最初に自由テーマ形式でゼミを進めることは有効である。そしてゼミの雰囲気になじんだところで、テキストを用いて共通の話題について皆で議論するのである。

いずれにしても、1年次の導入的なゼミの場合、ゼミ生が発言しやすい雰囲気を形成することが肝要である。そのためには、特定のやり方に固執する事なく、学生の反応を見ながら柔軟に対応して行く事が実際には求められる。

### 3.3 電子メール活用は有効か

2.5節でも述べた通り、現状では学生の8割が1週間に1度しかメールをみていない。しかし、このような使用頻度の低い現状でも、今年度のように発表のテーマ内容についての告知等、ゼミの連絡事項に使用する事は可能である。指導する側が指示を徹底すれば竹田担当ゼミのように、全員がゼミのメーリングリストに一度は投稿するようになる。また、後藤担当ゼミでは、指導員と学生との間でメールのやりとりを行うようになって、両者の親近感が増し、その後のゼミの運営もよりスムーズに行くようになった。これは他のゼミでも言える事である。このように、現状では、メールを用いて議論するというレベルには至っていないけれども、週に1回しか顔を合わせない指導員と学生のコミュニケーションをより親密にするという点では役に立っている。

この点については、教員である森田と学生とのコミュニケーションについて特に言えることである。森田は4つのゼミを巡回するため、学生からすると平均して4週に一度しか顔を合わせない。その意味で疎遠になりがち

であるが、学生とのメールがコミュニケーションを補完する手段として有効である。実際、今期学生から森田宛に発表内容に関するメールがいくつか来たが、簡単なコメントとアドバイスを付して返信したところ、その後当該学生から経過報告等のメールがあり、また直に言葉を交わすようになった。このように、現在のようなゼミの形式では、専任教員と学生とのコミュニケーションの補完手段として電子メールは有効であると思われる。

さらに、単なるコミュニケーション手段のみならず、高橋担当ゼミで一部試みたようにレポートに準ずる形で期限を決めて意見をメールで出させる事はゼミの議論をより活発にする上で有効である。もちろん議論はゼミ中に行うことがベストなのであるが、時間的制約のため議論の時間を十分にとれない場合や、話題が次へ進み発言のタイミングを逸したりした場合など、思うように発言できない事もある。そのような場合でもメールを通じて意見を出す機会を保障する事で、より多くのゼミ生に発言のきっかけを与える事になるからである。メールで自分の意志表示ができたゼミ生は以後のゼミへの参加の仕方がより積極的になる事が期待される。

また、4つのゼミ共自由テーマになった後期においてであるが、複数のゼミで同様なテーマが取り上げられた事が少なからずあった。その際、他のゼミでどのような点が議論になったのか関心を示す学生も相当数いた。実際、合同ゼミで議論したいという希望を述べた学生もいる。この事を考えると、少なくとも各ゼミの発表テーマをメールで公開し、希望すればそのテーマでの議論内容について発表者に問い合わせできるというようにしたら有効であると思われる。お互いの議論が刺激となって、より議論が深化する方向に向かう事が期待されるからである。次年度以降検討してみる価値はあるであろう。

### 3.4 プレゼンテーションツール活用は有効か

最後に、発表におけるプレゼンテーションツールの活用については、電子メール以上に指導する側の働きかけが必要である。しかし、一旦興味を示すと竹田担当ゼミのように多くのゼミ生が使用を試みると思われる。

発表の様子をみていると、プレゼンテーションツールを用いて発表した学生はいずれも楽しそうに取り組んでいた。ある意味では遊び感覚で準備を行っていたようであるが、プレゼンテーションツールの活用により、他者に分かりやすく発表内容を提示するという意識がゼミ生の間で高まった事は疑いない。また、一方で実際にいくつかの発表を経験する事により、当初一部の学生にあった、ツールを用いて見栄えをよくすればいい発表になる、という誤解も自然に解消されて行ったように思われる。プレゼンテーションツールを用いる事は、プロジェクタやノートパソコンの用意等、指導する側も一定の手間がかかるが、今後も積極的に活用して行く価値があると思われる。

いうまでもなくプレゼンテーションツールは決して万能ではない。発表テーマによっては、使用する意味がほとんどない場合もあるであろう。しかし、その判断はやはり実際の使用経験によって培われるものである。その意味で、学生にとっても早い時期に実際の発表等で使用経験を積んでおく事が望ましい。その結果、テーマ内容に応じて、プリントを使ったり、OHPを使ったりあるいはPower Pointを使ったりする事が学生自身の判断でできるようになれば、ゼミでプレゼンテーションツールを活用する事の目的は十分に達成されたと言える。

### 3.5 より活気のあるゼミとするためには

恐らく、活発なゼミとするための万能な方法というものはないであろう。むしろ今年度の経験では、指導する側であまり詳細にゼミ



のやり方のルールを設定してしまうと、学生の方はそのルールさえ守ればよいという消極的な姿勢に陥りがちである。

では、どのようにすればゼミにおいて学生の積極性を引き出せるのであろうか。学生を観察していると、本基礎ゼミナールのような1年次の導入的なゼミの場合は、指導員や教員からの上からの刺激よりも同僚である他のゼミ生からの刺激の方により敏感であるように思われる。つまり、何か面白い発表をしたゼミ生がいると、それに触発されて自分もいい発表をしようと頑張るといふ、いい意味での対抗意識が芽生えるのである。それを端的に物語っているのが後藤担当ゼミのケースである。後期において、前期の発表がうまく行ったと思える学生から順番に発表を行ったところ、順番が後のゼミ生は最初のゼミ生の発表に刺激されて、前期に比べればかなりいい発表を行っている。

この点は、竹田担当ゼミにおいてプレゼンテーションツールが多く、ゼミ生に活用された背景にもつながっている。最初にPower Pointを用いて発表したゼミ生は、画像や効果音を駆使して皆の関心を引きつけた。これを見たゼミ生は「なかなかやるな」あるいは

「自分もやってみたい」と考えたはずである。もちろん内容の伴わない浅薄な装飾に対抗意識を燃やすことは本筋から外れることであり適切な指導が必要であるが、より皆を引きつけたいという欲求が最初の発表によって刺激された事は間違いない。そしてそのことは、ゼミの雰囲気をもっと活気のある方向に向かわせる。

このような意味で、指導する側としては色々なやり方を工夫しながらも、常にゼミ生同士が刺激し合う雰囲気を形成するように心を配る必要がある。この観点から、司会者をおく、発表者を2人おく、指定討論者をおく、自由テーマでやらせる、電子メールを意見交換に活用するなどの方法を、学生の反応を見ながら柔軟にゼミ運営に活用して行く事で、より活気のあるゼミを実現する事ができるように思われる。

#### 文献

- 金子 務(1993)『さらばアリストテレス — エピソード科学史異聞 —』平凡社
- 下條信輔(1996)『サブプリミナル・マインド』中公新書